榎小才三と申す者も出入して居つたのである。庭園に就て申しますれば、今日の文庫の邊には花壇があつて、色々の草花が咲き亂れて居つてアノ今日動物園内に屬する南方の谷間は、あれは後に動物園に貸したので、當時は熊笹が繁茂して居つたのである。裏の方では今日にては大分擴がつて居るが、以前は今の大弓場あたりは護國院の境内であつて、今の裏門の並びは鑄金科の鑄物場の出來る爲めに後に擴げられたので、前には裏門は今のより四五間中程にあつて、垣根は今の圖書館のものゝ様な石垣土手であつた。今日裏門内に長く敷かれた飛石は、即ち之の垣根の石を用ゐたのである。サテ最後に申しますが一躰此の美術學校の前身と申すは、小石川植物園時代でありまして、之れが歴史的に申しますれば神代とも史前ともいひましやうか、此の時代には逸話奇談は中々ありまして、隨分面白き事もあります。それから愈第一期時代とも申しまするは前に略々申上げました様な創業時代で、學校組織やら、轉宅やらで、混雑ながら緒についたのであります。眞柴左金吾、加藤直景とかう突飛に申しますると、太閤記(ママ)にでもあるものゝ様でありますが、之れは此の學校の神代即ち小石川植物園時代頃よりの小使の名でありまして、何れも一騎當千の强の者で、小使部屋に於ける各一方の旗頭でありました。それから此の當時の學校の經費は、たしか一年一萬二千圓位と記臆して居ります。而して御雇教師のフエノロサ氏には、此内から年に六千圓仕拂ひましたのですから、學校の經營は、思ふ様にはされませんでした。

第七節　生徒募集、開校

募集方法

第一回生徒募集は明治二十一年十一月に実施された。左記は同年同月二十五、二十六日の『東京日日新聞』広告欄に掲載された募集広告である。

東京美術學校生徒募集

本校普通科第一年級生徒五十名（今回ハ男生徒ニ限ル）ヲ募集ス本校規則入學規程ニ照準シ入學志願ノ者ニシテ本校ニ於テ試驗ヲ受クヘキモノハ願書ニ履歴書ヲ添ヘ來ル十二月十五日ヨリ二十二マテニ差出スヘシ試驗ハ同月廿五日ヨリ之ヲ始ム

入學試驗課目

㈠讀書作文　漢字交り文
㈡算　術　全　體
㈢日本歴史　大　要
㈣臨　畫
㈤圖按若クハ彫刻模造

㈠㈡ノ課目ハ尋常中學校第二年ノ程度ニ準ス府縣特選ニ係ル者ニ就テハ此際本校ヨリ府縣廳ヘ照會シ置ケリ

東京美術學校

この広告文や「東京美術学校規則」に記されているとおり、募集方法に二通りあり、一つは本校における入学試験の実施であり、もう一つは地方庁特選法であった。応募資格は満十六歳以上、満二十五歳以下の品行善良、身体強健なる者と定められているのみで、性別を制限する規則はなかったが、右の広告文や或いは地方庁に配布した募集要項には男子に限ることが明記されており、事実上、本校は第二次大戦後まで女子の入学を認めなかった（外人女子の入学を認めた例はある）。

この最初の生徒募集に応じて入学願書を出した溝口宗文は、次のように当時を回顧している。

（上略）其の入學試驗の前にちよつと面白いのは入學願書を差出すのにどこに持つて行つたかといふと、先刻鳥渡申ました學校創立事務所であつた。いまの小石川の植物園の一番隅にありました圖書取調所（ママ）の小屋がありまして、そこに行くのでした。いまは町になつてをりますけれども、植物園の前はその頃全く田圃で、砲兵工廠のところを通つていまの指ヶ谷町あたりから左に入つて田圃道を行つて植物園内の事務所へ持つて行つたのです。又そのときの書生の風はみな朴歯の下駄を履いて、粗末なる着物と袴を着てをつたものでしたが、思ひ出しても現代と隔世の感があります。そこで芳崖さんや諸先生が繪を描いておられたものである。そこには圖書取調所（ママ）といふ小さな札が掛つてをりました。（下略）

（「溝口翁に明治の美術界を聴く」『古美術』第十三巻第十二号。昭和十八年十二月）

第一回入学者選抜

第一回入学者選抜は明治二十一年十二月二十五日から同月二十八日にかけて実施された。志願者総数一三八名。このうち本校で受験した者一一四名、地方庁特選に係る者二四名。本校での試験の課目は次のとおりであった。

(一) 読書および作文（漢字交り文）
(二) 算術（全体）
(三) 日本歴史（大要）
(四) 臨画
(五) 図案若しくは彫刻摸造

(一)については「画山水を見るの記」という題で作文せよという問題が出された。受験生たちは、左記の例が示すとおり、各自経験に基づいて文章を作った。

学科試験答案

甲上　畫山水ヲ觀ルノ記

蒼崖百尺、碧潭千尋、奔泉一道深ク雲烟ヲ窄チ去リ、俯仰其恰ント際崕ヲ見ズ、岩ニ横フノ老松槎枒ノ双龍ノ相争フガ如ク、水ニ激スルノ盤石兀トノ猛虎ノ谷ニ嘯クニ似タリ、樹掩ヒ苔長ジ日暗ク雲闢シ人ヲノ見ル〳〵竦然トノ毛髪立チ膚粟ヲ生セシム之レ則チ日光山華巌ノ瀑ノ畠也唯憾ムラクハ其ノ何人ノ